

第992回サントリー定期シリーズ

11月10日(金) 19:00開演 サントリーホール

第993回オーチャード定期演奏会

11月12日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第158回東京オペラシティ定期シリーズ

11月16日(木) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

11/10

11/12

11/16

指揮：アンドレア・バッティストーニ

チェロ：佐藤晴真*

コンサートマスター：三浦章宏

〈チャイコフスキー没後130年〉

チャイコフスキー：幻想曲『テンペスト』Op. 18 (約21分)

チャイコフスキー：

ロココの主題による変奏曲 イ長調 Op. 33* (約20分)

序奏 モデラート・アッサイ・クワジ・アンダンテ

主題 モデラート・センプリーチェ

第1変奏 テンポ・デッラ・テーマ

第2変奏 テンポ・デッラ・テーマ

第3変奏 アンダンテ

第4変奏 アレグロ・ヴィーヴォ

第5変奏 アンダンテ・グラツィオーソ

第6変奏 アレグロ・モデラート

第7変奏 アンダンテ・ソステヌート

第8変奏 コーダ：アレグロ・モデラート、コン・アニマ

— 休憩 (約15分) —

チャイコフスキー：幻想序曲『ハムレット』Op. 67a (約20分)

チャイコフスキー：幻想序曲『ロメオとジュリエット』(約20分)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

共催：公益財団法人 東京オペラシティ文化財団(11/16)

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等創造支援事業(創造団体支援))

独立行政法人日本芸術文化振興会(11/10)

後援：日本シェイクスピア協会 協力：Bunkamura(11/12)



- ♪ 本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
- ♪ 演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
- ♪ 曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
- ♪ 演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
- ♪ 演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 首席指揮者

1987年ヴェローナ生まれ。国際的に頭角を現している同世代の最も重要な指揮者の一人と評されている。2013年ジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ歌劇場の首席客演指揮者、2016年10月東京フィル首席指揮者に就任。

『ナブッコ』『リゴレット』『蝶々夫人』（二期会）、グランドオペラ共同制作『アイダ』のほか、ローマ三部作、『展覧会の絵』『春の祭典』等数多くの管弦楽プログラムで東京フィルを指揮。東京フィルとのコンサート形式オペラ『トゥーランドット』（2015年）、『イリス（あやめ）』（2016年）、『メフィストフェレ』（2018年）で批評家、聴衆の双方から音楽界を牽引するスターとしての評価を得た。同コンビで日本コロムビア株式会社よりCDのリリースを継続している。

スカラ座、フェニーチェ劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、スウェーデン王立歌劇場、アレナ・ディ・ヴェローナ、バイエルン国立歌劇場、マリンスキー劇場、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、イスラエル・フィル等世界の主要歌劇場・オーケストラと共演を重ねている。2017年には初の著書『マエストロ・バッティストーニのぼくたちのクラシック音楽』（音楽之友社）を刊行。

2021年、東京フィルとの録音『ドヴォルザーク新世界&伊福部作品』欧米盤が欧州の権威ある賞の一つ「OPUS KLASSIK 2021」交響曲部門（20-21世紀）を受賞した。

Website <http://www.andreabattistoni.it/>Facebook <https://www.facebook.com/Andrea-Battistoni-159320417463885/>

11/10

11/12

11/16

11/10

11/12

11/16



©Seiichi Saito

チェロ

佐藤晴真

Haruma Sato, cello

現在、その将来が最も期待される新進気鋭のチェロ奏者。2019年、長い伝統と権威を誇るミュンヘン国際音楽コンクール チェロ部門において日本人として初めて優勝して、一躍国際的に注目を集めた。18年には、ルトスワフスキ国際チェロ・コンクールにおいて第1位および特別賞を受賞している。ほかにも泉の森ジュニアチェロ・コンクール金賞、全日本学生音楽コンクール第1位および日本放送協会賞、日本音楽コンクール第1位および徳永賞・黒柳賞、ドメニコ・ガブリエリ・チェロコンクール第1位、アリオン桐朋音楽賞など、多数の受賞歴を誇る。

18年、ワルシャワにて「ショパンと彼のヨーロッパ国際音楽祭」に出演。19年には、本格デビューとなるリサイタル公演を成功裡に終える。

20年11月には、名門ドイツ・グラモフォンよりデビューアルバムとなる『The Senses ~ブラームス作品集~』をリリースし、第13回CDショップ大賞2021クラシック賞を受賞。21年11月には、セカンド・アルバム『SOUVENIR ~ドビュッシー&フランク作品集』をリリース。今春、待望の3rdアルバム『歌の翼に~メンデルスゾーン作品集』が同じくドイツ・グラモフォンよりリリースされ、発売当初より話題を集めている。

20年、音楽芸術文化の発展に貢献し、将来一層の活躍が期待される若手チェリリストに贈られる、第18回齋藤秀雄メモリアル基金賞、第30回出光音楽賞を受賞。21年度文化庁長官表彰。22年、第32回日本製鉄音楽賞を受賞。江副記念リクルート財団第52回奨学生。

使用楽器は宗次コレクションより貸与されたE.ロッカ1903年。ベルリン在住。

楽 曲 紹 介

解説＝山本明尚

ロシアとシェイクスピア

ロシア国内でシェイクスピアが本格的に受容されたのは19世紀前半のこと。ロシアの文学者たちは彼の作品に強い関心を持ち、例えばロシアの国民詩人プーシキンの代表作の一つでオペラ化もされた「ボリス・ゴドゥノフ」は、登場人物の心理の描写と時代の正確な描写にその作劇法が活用されたものと言われる。ロシア語翻訳も盛んに行われるようになり、1860年代には本格的な学術的研究もなされるようになる。

この19世紀前半のシェイクスピア人気の高まりは、ロシアにおける自国独自の音楽文化の成立期と一致している。チャイコフスキー(1840-1893)が外国の作家であるシェイクスピアの作品をテーマに管弦楽曲を3曲も作曲したのは、この年代的一致にも関連しているだろう。本日はその3曲全てと、年代こそ違えど古典を規範とする『ロココの主題による変奏曲』をお聴きいただく。

チャイコフスキー

幻想曲『テンペスト』 Op. 18

絶海の孤島を舞台とした魔法と策略の物語、シェイクスピアの最後期作「テンペスト」は、上演からこれまで人気を博し、音楽家たちにもインスピレーションを与えてきた。例えばベートーヴェンが自身のソナタの解釈を尋ねられて「『テンペスト』を読め」と返答した逸話は、弟子シンドラーの作り話だという可能性が高いにも関わらず、あまりにも魅力的で有名なエピソードである。

1872年、音楽評論家ヴラジーミル・スターソフは、新しい楽曲のアイデアに苦しんでいたチャイコフスキーに「テンペスト」から筋を取って交響作品を書いたらどうかと提案する。スターソフは、1860～70年代に集団的に活躍したロシアの作曲家グループ、いわゆる「ロシア五人組」のスポークスマンだった。したがって当然彼らの標題音楽の作り方も熟知しており、チャイコフスキーに登場人物をどのように音楽で描写すべきかのやり方も示した。こうして幻想曲『テンペスト』は1873年に完成し、スターソフに献呈された。

弦楽器のうねるような音型から始まる序奏は、不穏に波打つ海を見事に描写している。主要主題は三連符を基調とする勇ましいものだが、荒々しい嵐を描く和音によって飲み込まれる。続く甘やかな旋律は、王子ファーディナンドとプロスペローの娘ミランダの愛を描く。空気の精エアリアルの軽やかな主題と島の怪獣キャリバンの荒々しい動機の間での争いが描かれると、愛の勝利が高らかに奏でられてクライマックスとなる。結尾には全員が島から解放され、波立つ海へと戻っていく。

【作曲年代】1873年

【初演】1873年12月19日、モスクワにてニコライ・ルビンシテインの指揮による

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、弦楽5部

チャイコフスキー

ロココの主題による変奏曲 イ長調 Op. 33

チャイコフスキーは、1876年末から1877年初頭、交響曲第4番などと並行して本作を完成させた。作曲の動機は不明だが、チェロと管弦楽のためのレパートリーが少ないことに不満を覚えていたことによる、という説がもっともらしい。初演のチェリストはチャイコフスキーの同僚・友人でモスクワ音楽院のチェロ科教授ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲンが務めたが、彼はチャイコフスキーから渡された楽譜を大幅に改変してしまう。主題の長さも変え、変奏の並びを変更、第8変奏の削除すらやってのけた「フィッツェンハーゲン改作版」は大絶賛をもって迎えられ、そのまま楽譜まで出版されることになった。このような行動にチャイコフスキーは動揺し、「もうどうにでもするが良い」と言い放ったという。結局チャイコフスキーの「原典版」の復刻の初演は1941年まで待たなければならなかったが、今日ではどちらの版もよく演奏されるようになった。本日はチャイコフスキーによる原典版をお聴きいただく。

音楽は主題と8つの変奏からなる。短い序奏に続く主題はチャイコフスキーの手によるものだが、均整が取れ、不協和音の少ない構成は明らかに18世紀フランスに源を持つロココの様式を模範にしている。続く変奏はどれもチェロの技巧を発露させるものであると同時に、チャイコフスキーのもつ多様な様式の引き出しを発揮させている。第2変奏ですでにチェロの独奏によるカデンツァを置くなど、創意工夫も光る。

【作曲年代】1876～77年

【初演】1877年12月1日、モスクワにてニコライ・ルビンシテインの指揮、ヴィルヘルム・フィツェンハーゲンのチェロ独奏による

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦楽5部、独奏チェロ

チャイコフスキー 幻想序曲『ハムレット』 Op. 67a

「ハムレット」に基づく交響作品の作曲の構想は、1876年に弟モデストからの提案に遡る。チャイコフスキーは当初難しいと断るが、1887年に再びこの構想に立ち戻る。このきっかけは、友人の死によって苛まれた喪失感や、遺言状をしたためるほどの人生観の変化によるともされる。交響曲第5番と並行して作曲したこの音楽は、他のシェイクスピア作品に基づく他の曲とは異なり、具体的にどのよう原作と関わっているのかはわかっておらず、後に様々な解釈がなされた。なお、本作はのち、「ハムレット」の劇付随音楽(Op. 67b)の一部に再利用されている。

音楽は形式的には比較的自由に作られている。作品全体の1/4を占める序奏は、それ自体が歌劇の序曲のような役割を負っており、「ハムレット」の悲劇的内容を予告している。第1主題は勇ましく鋭いリズムが特徴的で、オーボエの独奏と木管楽器の伴奏によって提示される対比的な第2主題は憂いをはらんだものとなっている。この対比は、悲劇的な対立関係と愛のせめぎあいだと分析されている。本作では愛そのものよりも復讐劇たる原作に合わせ、劇的な進行と登場人物の戦いを描くことに重きが置かれているためか、第1主題の勇ましさが主軸となって、音楽は華やかに展開されていく。楽曲はハムレットの死を描写する葬送行進曲によって、文字通り「死にゆくように」の指示によっておごそかに締めくくられる。

【作曲年代】1888年

【初演】1888年11月24日、サンクトペテルブルクにて作曲者自身の指揮による

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、サイドドラム、小太鼓、タムタム、シンバル)、弦楽5部

11/10

11/12

11/16

チャイコフスキー 幻想序曲『ロメオとジュリエット』

チャイコフスキーは「五人組」のスポークスマンだったスターツフに提案されて『テンペスト』を書いたが、『ロメオとジュリエット』もまた、1869年に「五人組」のリーダー的作曲家、ミーレイ・バラキレフに提案されて着手したものである。バラキレフは劇的構成や調構造を具体的に提案し、先輩作曲家としての創作過程の心理状態に関するアドバイスも与え、チャイコフスキーを助けた。初版が完成し、初演が行われた後、その反応も踏まえてチャイコフスキーは第2版を1870年に、さらにかつての作品の不足点を直す形で1880年に決定版となる第3版として書き直し、今日に至る。このような経緯から『ロメオとジュリエット』は、駆け出し作曲家だったチャイコフスキーが先輩作曲家からの助言を得て、作曲家としてのキャリアを得るために力を込めて作曲した意欲作だと言える。

作品の中には、下敷きとなったシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」の劇的進行が反映されている。教会の聖歌を思わせる厳かな和音を軸にした序奏は、徐々に熱を増しながら主要部分の第一の主題へと至る。鋭いリズムと激烈な和音進行には、劇作品の両家の憎悪と、両家が剣を交えるさまが描写されている。美しく、しかし情熱を帯びる対照的な「愛の主題」は主人公二人の愛を描くもの。同時代の人々はこれを「ロシア音楽全体の中で最高の主題」とも讃えた。主題の展開と短い再現の後、序奏と同じような雰囲気を持つ宗教的なまで厳かな和音を背景に、華々しく音楽は閉じられる。

【作曲年代】1869年(第1稿)、1870年(第2稿)、1880年(第3稿)

【初演】1870年3月16日、モスクワにてニコライ・ルビンシテインの指揮による(第1稿)／1872年2月17日、サンクトペテルブルクにてエドゥアルド・ナブラーヴニークの指揮による(第2稿)／1886年5月1日、トビリシにてミハイル・イッポリトフ＝イワノフの指揮による(第3稿)

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル)、ハープ、弦楽5部

やまもと・あきひさ／音楽学者。専門は19世紀後半～20世紀初頭のロシア芸術音楽。現在、東京藝術大学大学院博士課程およびロシア国立芸術学研究所に在籍。モスクワを拠点として研究活動を行う。2020、21年度公益財団法人ローム ミュージック ファンデーション奨学生。日本音楽学会、日本ロシア文学会、ロシア・フォークロアの会各会員。

11/10

11/12

11/16